



## 私のふるさと

### 港町尾道、お寺と坂の町尾道

有元 康人

海が見えた、海が見える。5年ぶりに見る尾道の海は懐かしい。林芙美子の放浪記でつぶられている尾道が私の故郷です。

尾道の港としての機能は、平安時代、世羅の大田庄荘園の年貢の積出港として始まったと記されています。江戸時代に入ると北前船の寄港地としてさらに重要視されるようになりました。

蝦夷の、海産物（昆布や干しアワビ等）を荷下ろしする港、また東北地方や九州など日本各地から集められた米や干イワシなどさまざまな商品が集まり、各地に搬出される港になっていきました。

西国街道や石見銀山の銀を運ぶ石見街道も尾道につながっており、海上輸送と共に内陸にも物資が運ばれていきました。

多くの豪商が生まれ商業都市として発展した尾道には、神社仏閣が数多くあり経済力の強さを表しています。

現在の尾道市は平成の市町村合併で因島市や瀬戸田町、御調町までの広範囲になっていますが、当時の尾道は、土堂町、十四日町、久保町の徒歩圏内の狭い3町だけで構成されていました。その尾道が、広島をしのぐ経済力を持っていたそうです。

尾道の政治は、毛利氏の時代から豪商と主従関係を結ぶことで商人に治めさせていたそうです。

江戸時代に入っても豪商による自治体制が続きさらに豪商だけでなく尾道に住む町民からの意見も吸い上げるボトムアップシステムもあったそうです。

私の家も十四日町で代々畳表卸商、雲丹製菓本舗などを営んでいたそうです。私が物心ついた時はすでに廃業しており、唯一覚えているのは畳表を工場で織っているガッチャン、ガッチャンという音だけです、それ以外では育った家が商家独特

の町屋だったことぐらいでしょうか？

私が育った頃の尾道周辺は、日立造船の2工場、尾道造船や中小の造船所が多数あり、造船の町に変わっていました。

尾道水道は大小の船舶で溢れており、捕鯨が行われている頃はシーズン後にメンテナンスに来るキャッチャーボートも数多く見られました。

船の進水式も、いつでも見られる普通の光景でした。

千光寺山の山頂が1500本の桜でピンク色に染まる花見、港まつり、秋田のなまはげに似たべっちゃり祭り、住吉神社の花火などさまざまな祭りがあり現在も続いています。

最近では、しまなみ海道がサイクリングの聖地になり賑わっていると聞きます。

私が子供の頃の思い出は、近所の子と三角ベース、夏休みには海水浴、周辺には、向島の干潮、岩子島、百島、加島などの海水浴場があり近所の悪ガキが集まって泳ぎに行きました。

特に干潮海水浴場には、学校が升を借りており、そこに服を置いて、海にドボン。

子供の頃、一番印象に残っている風景は、向島の高見山から見下ろした瀬戸内海です。

皆さん想像してください。眼下の波一つない瀬戸内海、黒松に覆われた大小の小島が浮かんでいます、そこにそよ風が吹くと、一面にさざ波が立ちます、風の方向が変わると、さざ波が幾重にも幾重にも重なって進んで行きます。そこに一隻の焼玉エンジンの小舟、ポーンポーンと丸い輪っかの煙を噴き上げながら、さざ波をかき分けて通り過ぎていく姿、時間を忘れて見とれていました。

尾道には、今も実家と、代々の墓があり私が管理していますが、今後どのようにしていくか、これからの課題として残っています。

この会で、尾道出身者は、私以外に3人の先輩がおられます。里山グループの村上さん、エコファームグループの木村さん、景観グループや日本蜜蜂の飼育を担当している中川さん、偶然の出会いですが、多くのご指導をもらいながら楽しく活動をしています。